

中動態の射程

森田 亜紀

倉敷芸術科学大学芸術学部

(1998年9月30日 受理)

はじめに

芸術体験を、その体験内部から語ることばを見ると、そこにフランス語であれば代名動詞による表現がしばしば用いられることに気づく。たとえば、ポール・クローデルは「オランダ絵画序説」において、或る風景画を前にした体験を

C'est la ligne en silence qui *se fait* parallèle à une autre ligne, c'est le spectacle après une pause pensivement qui *se laisse* reprendre par le rêve et spiritualiser par la distance¹⁾. (強調は引用者)

(訳) 静寂のなかで、或る線が別の線と平行になり (*se faire* parallèle), 或る情景が、沈思の間合いを置いて、ふたたび夢想にとらえられ (*se laisser* reprendre), 距離を介して精神化されてゆく (*se laisser* spiritualiser)。

と記述しているし、ゴッホの手紙にも

……le sens des couleurs *s'est réveillé* en moi pendant que je peignais; il *se manifest* puls fortement et d'une autre façon qu'auparavant²⁾. (強調は引用者)

(訳) ……絵を描いている間に、私のうちに色の感覚が目覚めた (*s'est réveillé*), それは以前より強く、別の仕方で現われる (*se manifester*)。

というくだりがある。メルロ＝ポンティは『眼と精神』のなかで

De même que le rôle du poète consisite à écrire sous la dictée de ce qui *se pense*, ce qui *s'articule* en lui, le rôle du peintre est de cerner et de projeter ce qui *se voit* en lui³⁾. (強調は引用者)

(訳) 詩人の役目が自分のなかで考えになること (ce qui *se pense*), ことばになること (ce qui *s'articule*) を書くことにあるのと同様、画家の役目は自分のうちに見えてくるもの (ce qui *se voit*) を囲い込み、投影することである。

というマックス・エルンストのことばを引用している。

これらの表現は、動詞が再帰代名詞を目的語とするというかたちをとってはいるが、決して自分自身を対象とするというような再帰的な意味をあらわすものではない。ラールス言語学辞典によれば、フランス語の代名動詞は、インド＝ヨーロッパ基語の中動動詞に対応するという⁹⁾。中動とは、中動態 (le moyen) の中動、能動態 (l'actif) ・受動態 (le passif) とならぶ、もうひとつの態としての中動態の中動である。

中動態は、われわれにあまりなじみがない。辞書には、インド＝ヨーロッパ語の態のひとつで、とりわけギリシア語にみられる／能動態や受動態とは異なる屈折をもつ／動作が直接的・間接的に主語に反映することを表わす、とある⁹⁾。われわれは通常、態といえば能動か受動かと考え、そのどちらでもない中動態といわれても、それがどういうものなのか、それによってどういうことが表わされるのか、すぐには理解できない。バンヴェニストは、思考の範疇が言語の範疇と深く結びついていることを指摘しているが¹⁰⁾、中動態を言語の範疇として意識することのなかったわれわれは、中動態やそれに対応する表現によって示される事態の性格を、それ自身として積極的に把握してこなかった、できなかったといえるかもしれない。

芸術体験が、中動態に対応する動詞のかたちであらわされる側面をもつとすれば、中動態という態は、芸術体験を考察するためのひとつ足掛かりになるはずである。中動態という態の性格をはっきりさせることを通じて、芸術体験の或る側面が新たに視野に入ってくるのではないか、芸術体験を考える際の新たな視野が開けるのではないか、というのがわれわれの見通しである。

1. 言語学者ケマーによる中動態理解

アメリカの言語学者スーザン・ケマーは、1993年に出版された『中動態』と題する著書で、中動態の一般特性を考察している。ケマーは、古代ギリシア語の動詞の屈折という限定された領域で中動態を考えるのではなく、インド＝ヨーロッパ系諸言語のこれまでの研究において一般的に「中動態」という用語が適用されてきた様々な事例を出発点として考察を進める。ケマーの挙げるそのような事例は、例えば以下の通りである。(太字は中動態を示す指標)

(1) 古代ギリシア語

lóúo- mai tās cheíras	私は手を洗う
hállō- mai	私は跳ぶ
boúlo- mai	私は望む

(2) 現代アイスランド語

hann klæddi- st	彼は服を着た
------------------------	--------

bókin fann-st	本が見つかった
ég vona-st til að fara	私は行きたい
(3) フランス語	
ce papier se recycle	この紙はリサイクルできる
le ciel se fait sombre	空が曇ってくる
le riz se cultive en Chine	稲は中国で栽培される
(4) 英語	
the book sells well	その本はよく売れる
the door opened	ドアが開いた
the soap that eats like a meal	食事のように食べられるスープ ⁷⁾

「中動態」という用語で指し示される表現は、このように意味もしるしづけの仕方もさまざまであるが、ケマーは、これらの表現に対応する表現が、多くの言語、インド＝ヨーロッパ語以外の言語にも、各々独自の指標をもって存在することを示し、このことに基づいて、諸言語にまたがるカテゴリーとして、中動態の一般的特性を考えていく。

ケマーは、中動態のひとつの典型として、「身体動作の中動 (Body action middle)」というタイプを考える。入浴する、服を着るというような身だしなみの動作⁸⁾、立ち上がる、座るといような姿勢の変化⁹⁾、身体を伸ばす、ねじる、揺るといような位置変化のない運動¹⁰⁾、飛ぶ、登るといような位置変化のある運動¹¹⁾が、いくつもの言語で、中動態を示す指標のついた動詞で表わされる。ケマーはこれらを「自分の身体に、あるいは自分の身体を通して、遂行される動作¹²⁾」と一般化するが、その特徴を、動作の「発動者 (Initiator)」が「終着点 (Endpoint)」と同一実体であるという点に見る。動作を起こすものがその動作によって自ら影響をこうむるということである。この特徴は、例えば鏡で自分の姿を見るとか、自分の体をたたくといった再帰的事態にもあてはまる。しかし再帰の場合、Initiator は他の実体に対するのと同じように自分自身にはたらきかけていて、そこには Initiator と Endpoint との相対的な区別・分離があると考えられる。たたくということ、たたかれるということが、ひとつの実体で別々のこととしてあるということであろう。これに対し中動では、Initiator と Endpoint が、或る実体のなかでの役割分担としてあるのではなく、ともにただひとつの全体としての実体に帰されるとされる。動作をおこすということとその影響をうけるということが、ひとつの実体において、分離しきれないかたちでおこっているということであろう。

ケマーは、再帰態と中動態とのあいだに、かたちの上でも意味の上でも密接な関係があることを示す。その上で、両者の意味論的区別を、「出来事に関与するもの (participant)」の「相対的区別可能性 (relative distinguishability)」の程度の違いというかたちで理解する。中動は再帰より関与者の区別できる可能性が低いというわけである。

こうしてケマーは、身体動作の中動態から、出来事をおこすもの (Initiator) 自身がそのことから影響をこうむる、という特徴、および出来事に関与するもの (participant) の相対的区別可能性が低い、という特徴を引き出す。そして、他のタイプの中動態も、この延長で理解しようとする。

ケマーは中動態のなかに、「認識の中動 (Cognition middle)」とよばれる、心的出来事の領域に関わるタイプも見いだす。恐がる・怒るというような情動¹³⁾、不平をいう・嘆くといった情動をことばにする行為¹⁴⁾、また場合によっては思う・考えるといった認識¹⁵⁾なども、複数の言語で、中動のしるしづけがなされている。ケマーは、心的出来事を、経験する者が何かの刺激に注意を向け、その刺激から心的出来事をもたらされると理解し、ここでもまた、注意を向ける Initiator が何らかの影響を受ける Endpoint でもあるという点、Initiator と Endpoint が互いに区別される度合いの低さ・なさを指摘する。そこではとりわけ、Initiator がこうむる影響 (affectedness) が、意味の重要部分をなすものとして強調される。

さらに中動態には、育つとか死ぬとか変わるといった、ひとりで起こる状態変化の表現¹⁶⁾、本が売れる (le livre se vend bien) とか、よく聞こえる (es hört sich gut) というようないわゆる受動的・非人称的な表現もある。ケマーはこれらで表現されるような出来事について、他動詞的な表現も可能であると考え。すなわち原因となる何か、出来事を引き起こす誰かを Initiator に取り、影響を受ける実体を Endpoint とする表現も可能だというわけである。それが、そのようなかたちではなく中動態で表現される場合、本来の動作主がコード化されず、影響を及ぼされる実体のみが、主要な関与者としてコード化される点が特徴とみなされる。ここでは、影響をおよぼされるものが Endpoint であるばかりでなく、それ自身、出来事を引き起こす Initiator として概念化されていると、ケマーは理解する。出来事は、影響をおよぼされるものから発するように、たとえばそれに内在する性格から発するように、表現されているというのである。ここにも、他のタイプの中動態と同様、Initiator が Endpoint であるというかたちが見取られる。他方ケマーは、影響をうけるものしかコード化されないという特徴を、「出来事の詳細化・精密化の度合いが低いこと (low elaboration of events)¹⁷⁾」と一般化する。可能性としては二つの関与者が含まれる出来事について、ひとつの関与者しかコード化されていないと見てのことである。ケマーによれば、さきの事例で見出された、Initiator と Endpoint が比較的に区別されえないという特徴も、出来事の精密化の度合いの低さを示すものである。

これらの考察を経て、ケマーは、中動態の一般的意味的特性を、

- 1) 出来事をひきおこすものがその出来事から影響をおよぼされる
- 2) 出来事の精密化の度合いが低い¹⁸⁾

と結論づける。

以上のようなケマーの考察は、われわれに中動態がどのようなものであるのかを或るかたちで教えてくれるものではある。しかし、InitiatorとEndpointという、主体と対象、主語と目的語に相当する用語で考えつづけているという点でなお、〈能動-受動〉の枠組みを前提としているように思われる。これに対して中動態を、〈能動態-受動態〉の対立とは別の、〈能動態-中動態〉の対立として考えたのがエミール・バンヴェニストである。

2. 言語学者バンヴェニストの中動態理解

バンヴェニストは1950年の論文「動詞の能動態と中動態」において、インド=ヨーロッパ語で〈能動態-受動態〉の対立以前に〈能動態-中動態〉の対立が存在した、と述べ、その〈能動態-中動態〉の対立が、〈能動態-受動態〉の〈行なう行為-受ける行為〉という対立とは全く別の意味をもつ、と指摘している。彼は、ギリシア語・ラテン語・サンスクリット語の能動態のみをもつ動詞、中動態のみをもつ動詞を比較することによって、その対立の意味を考える¹⁹⁾。

彼はそこから、

能動態では、動詞は、主語から出発して主語の外で実行される過程（プロセス）を示す。中動態はこれとの対立によって定義されるべき態であるが、そこにおいて動詞は、主語が過程の座であるような過程を示し、主語は過程に対し内的である²⁰⁾。

という結論を導く。

能動態と中動態の対立を、このように主語が過程に対し外的であるか内的であるかの対立とみなすと、中動態の動詞が能動態を与えられたときに他動詞性（transitivité）をもつという事実も、無理なく理解できる。すなわち中動態の能動態への転換は、主語の、過程に対する関係の変化を意味し、「主語は過程に対し外的となり、その過程の動作主となる。そして過程は、もはや主語を場所とせず、別の項に移されて、その項がその目的語となる²¹⁾」と理解される。たとえばギリシア語で「眠る」を意味する中動態の動詞では、主語が彼なら、彼が眠っているのだが、それが能動態にかわると、眠るという出来事が彼ではない他の誰かのところでおこることになり「彼が誰かを眠らせる」を意味する表現になる、という具合である。バンヴェニストはまた、サンスクリット語の「犠牲を捧げる」という動詞（たとえば神に羊か何かを犠牲に捧げて何かを祈るという儀式の動詞であろう）が、僧侶や司祭が誰かのために代わってそれを行なう場合は能動態であり、自分が自分のために自分で行なう場合は中動態であるというような事例に関しても、主語が過程の外にあるか内にあるかの違いから理解する。能動態の場合、主語となる僧侶や司祭はただ単に外からことを行なっているだけなのに対し、中動態の場合、ことを行なうものは過程のな

かで自らその影響を受けながら、つまり犠牲を捧げることの効果を我が身にひきうけるかたちで、行なっているというのである。

主語は過程の座であり、過程に対し内的である、というバンヴェニストの中動態理解はさきに見たケマーの中動態理解と重なり合うところがある。InitiatorがEndpointすなわち影響をこうむるものでもある、ということは、出来事がInitiatorすなわち主語のところで起こっているということ、主語が出来事の内にもまきこまれてあるということと、同じことではないだろうか。ただケマーは、主語を、能動態の主語をモデルに考えているように思われる。ケマーは主語をInitiatorと呼びつづけるが、そこにはやはり、主語を、そこから発して出来事が起こる存在、出来事を引き起こす存在とする考え方が透かし見える。だからこそ主語が受動態でもないのに出来事から影響をこうむった場合、InitiatorがEndpointと見分け難い、出来事の精密化の度合いが低い、と言わざるをえないのだろう。これに対してバンヴェニストの捉え方は、〈能動-受動〉関係における能動態の主語とは全く別の主語のあり方を提起するものである。主語が、主語のところで主語をうちに含みながら生じる出来事において、元の状態とは異なった状態になる——中動態をバンヴェニストに従ってこのように捉えると、中動態は、主語というものについて、主語と動詞によって示される過程との関係について、われわれのこれまでの考え方に変更を迫るものだといえよう。

3. 現代思想における中動態への言及

今世紀後半、思索の枠組みが問題にされる場面で、ひとはしばしば中動態に言及している。〈能動-受動〉、〈主体-客体〉(sujet-objet: 〈主語-目的語〉)という二分法では捉えきれないものごとが問題になるとき、中動という第三のカテゴリーは持ち出されるようである。中動態が、認識の枠組みとして用いられるとき何が積極的に主張されるのか、どのようなことがらが視野に入るのか——中動態へのさまざまな言及を検討することによって、言語学の領域を越えた中動態の射程が、見えてくるものと思われる。

批評家であるロラン・バルトは、1966年の小論「書くとは、自動詞か」で、さきのバンヴェニストの論に依拠しながら、書くということが、今日、中動態で考えられるべきものであると主張する。彼は、書く主体が、書くということの外に、書くということに先立ってあるとは考えない。書くことにおいて、主体は、書くという過程の内部にあるというのである。

中動態の、書く (écrire) ということにおいて、主体はエクリチュールと (de: から) 直接に同時的なものとして構成される (se constituer), エクリチュールを介して実現され (s'effectuant), 影響をこうむる (s'affectuant)²²⁾。

とバルトは書いている。代名動詞が続出する表現である。バルトは中動態へ言及を通じて、一般に考えられている主体とは異なる或る主体のあり方を示そうとしたのだと言えよう。通常考えられている主体は、行為以前に存在し、その過程を外側から制御する安定した自己同一的主体である。これに対しバルトが中動態で示そうとするのは、過程のなかで成立し、過程を通じて変化していく主体なのである。

精神分析家ジャック・ラカンもまた、1955年のセミナーにおいて、シニフィアンと主体との関わりを考察する文脈で、パンヴェニストのさきの論文に言及している。彼はパンヴェニストが示した中動態しかもたない動詞（生まれる、死ぬ、或る動きに従いかつそれを進める、自由に使える、寝ている、慣れた状態に戻る、遊ぶ、利益にあずかる、苦しむ、辛抱する、心のざわめきを感じる、処置を取る、話す）について、それらが、精神分析的経験ではたらいっている領野であること指摘する。そして、

これらに共通するものは何か。検討してみると、これらは、動詞が表現する過程や状態の中で、主体（＝主語）がそれとして構成される（*le sujet se constitue comme tel*）ということを、共通点としてもっている²³⁾。

と考察している。精神分析にとって、主体は自明な所与ではなく、探求すべき問題である。「私 (je)」というかたちで文の主語 (sujet) になりうる主体 (sujet) は、動詞の中で、それとして構成される。ここにも *se constituer* という代名動詞の表現が見られるのは、偶然ではないだろう。ラカンは、そこではたらく動詞が、いくつもの言語で中動態のみをもつものであることに注意を向けるのである。ここで中動態は、はっきり主体の成立と関係づけられている。

中動態を、主体の成立のみならず、それに対応する対象の世界の成立、日常的体験における主体－客体関係の成立と関係づける論考も、精神病理学の分野でなされている。分裂病者には、日常の行為や思考において、その都度絶えず意に反して自分が意識される、何が違うかという内容なしに自分が人と違っているという感じだけを強くもつ、というような、自己意識のあり方が指摘されているが、長井真理は1990年の論文「分裂病者の自己意識における「分裂病性」」において、このような分裂病者に特徴的な自己意識のあり方を「非対象的・非措定的な自己への関与の充進²⁴⁾」と一般化している。そしてこの非対象的・非措定的な自己関与を、デカルトのコギトを手掛かりとして理解しようと試みる。すなわち、デカルトのコギトは、単なる能動的な「私は思う」ではなく、感覚すること・思惟すること・想像することなどを含む私のさまざまな能動的あるいは受動的な行為に伴う「……と思われる、と見える」である。デカルトの『省察』2の

今私は光を見、騒音を聞き、熱を感じる。これらは虚偽である、私は眠っているのだから

ら、といえるかもしれない。けれども確かに、私には見ると思われ (videre videor), 聞くと思われ, 熱を感じると思われるのである。これは虚偽ではありえない²⁵⁾。

という箇所は、確実であるのが、videtur という動詞であらわされる「私には……と見える, 思われる」だということを示している。そしてこの videtur というラテン語の動詞は、形式的には受動態だが、中動態に由来するという。長井真理は、分裂病者において亢進している非対象的・非措定的自己関与が、この中動態の「私には……と思われる」に相当すると考える。そしてやはりパンヴェニストをひき、「私には……と思われる」の「私」が通常の〈主体-客体〉関係における能動的な主体ではないということ、そして私に見えるものも客体ではないということを強調する。長井真理の論考は、非対象的・非措定的とされる自己関与が中動態であらわされるものであって、なおかつ通常の〈主体-客体〉関係、主体と客体あるいは世界の明証性を支えている、と要約されるが、われわれはここから、中動態が、私が私であり世界が世界であることを支える或るはたらきを射程に含む、ということを見て取ることができよう。

長井真理のいう自己関与は、非措定的・非対象的といわれる以上、再帰的な私の私への関係、主体の主体自身への関係ではなく、いわば関係項なしの純粋な関係、純粋な差異と理解することもできよう。この種の項なき差異——時間的・空間的差異化のはたらきを *différance* という造語で概念化したのが哲学者ジャック・デリダである。そして彼もまた、この *différance* について、それが「何か中動態のようなものを告げ、呼びおこす」と書いている。それは、

作用ではない作用、主体の客体に対する（主語の目的語に対する）能動としても受動としても考えられない作用、動作主から出発しても受動者から出発しても、これらの項のどれから出発してもどれをめぐしても考えられない作用を言うのである²⁶⁾。

とデリダは述べる。positif な項がまずあるのではなく、時間的空間的な差異化のはたらきがそれに先立ちそれを支えるという、或る根源的事態を概念化する際、デリダは中動態に言及する。

以上、中動態への言及を概観したが、それらはどれも何らかのかたちで、主体が主体であること、ものがものであることの、差異化を通じた成立に関わるものだと言うことができよう。

4. 芸術体験と中動態

最後に、芸術体験に関してなされた中動態への言及を見ておこう。オイゲン・フィンクは1930年の論文「現前化と像」において、画像 (Bild) の「窓性 (Fensterhaftigkeit)」を指

摘する。画像は、絵の具や画布といった現実的な支持体と、非現実的な絵の中の世界すなわち像世界、という二つの層とがひとつになったものであり、そのことによって、例えばわれわれのいる部屋という現実世界に非現実の世界が開かれる、とフィンクは分析する。像は、現実の世界と非現実の世界をつなぐ窓だというのである。

その関連者である像知覚の意識を、フィンクは中動作用 (Mediale Akt) と呼ぶ。

像知覚はひとつの中動作用である。すなわち、それ自身のうちに、非現実性の初源的な場所 (Worin) を構築する、体験の仕方である²⁷⁾。

フィンクはおそらく、姿勢の変化を表現するような中動態を頭におき、自らが自らにはたらきかけて変わっていく (その結果、見る者は像世界における主体にもなる) という意味をこめて、像知覚を中動作用と言っているのだと思われる。

さらに、意識の中動作用に呼応して非現実の像世界が開かれるとき、その出来事は sich öffnen と、再帰動詞で表現される。

……どの像世界も本質的に現実世界の中へと開かれていく (sich öffnen)。この開かれ (Sichöffnens) の場所が、像である²⁸⁾。

われわれにとってすでにある現実世界のただ中へ、像世界という別の世界が開かれる、ひらけてくる。ここでいわれる Sichöffnens は、自分で自分を開く (自己開示) というような再帰の意味ではなく、その出来事を通じていわばひとりでに世界がひらけてくるという、中動の意味で理解されるべきだろう。

われわれはフィンクの記述に、中動態で表現されるべきひとつの出来事を読取ることができる。主体と世界とがともにそれとして生じてくる出来事——ただし今度は「非現実」という別の次元で、あらためて生じてくる出来事である。

3でとりあげた中動態への言及は、私が私として成立し、ものがものとして成立し、世界が世界として成立することを包み支える、〈能動-受動〉以前のいわば根源的な出来事やはたらきを、人々が考えようとする際、なされたものであった。このような出来事やはたらきは、日常生活のなかではことさら意識されることの少ない、いわば隠蔽されたものといえるだろう。フィンクもそれに類する出来事やはたらきを見出すが、ただしそれは、日常体験とは区別される芸術体験においてのことである。フィンクが考えているのは、日常の体験における主体や対象や世界ではなく、芸術体験における主体や対象や世界である。フィンクにとって中動態であらわされるべき事態は、あくまで絵画を見るという芸術体験の特徴として捉えられている。芸術体験においてそれは、日常におけるように隠蔽されてはおらず、むしろ主題化されているのではないだろうか。

冒頭にひいた芸術体験を語ることは、体験内部でひとが、中動態であらわされるべき事態に気づくということを示している。

さきのクローデルの引用「静寂のなかで、或る線が別の線と平行になり (se faire parallèle), 或る情景が、沈思の間合いを置いて、ふたたび夢にとらえられ (se laisser reprendre), 距離を介して精神化されてゆく (se laisser spiritualiser)」において、代名動詞の主語は、線や情景という、いわば対象の側に属するものである。芸術体験において、ものやことは、あらかじめそれ自身としてあるのではない。体験のなかで体験を通じてそこにそのようなものとして生じてくる。ゴッホの「……絵を描いている間に、私のうちに色の感覚が目覚めた (s'est réveillé), それは以前より強く、別の仕方で現われる (se manifester)」では、感覚といういわば主体の側に属するものが主語である。芸術体験において、私はあらかじめある私として出来事を支配しているのではない。私は主体ではなく、体験のなかで体験を通じてこのような私として生じてくる。

芸術体験を記述する中動態の文において、主体の側、対象の側、いずれの側も同じように主語になる。2で見たように、中動態の主語は出来事の内にいる。動詞のあらゆる出来事のなかから、名詞で指し示すことのできる何かが、差異化を通じてそれとして成立する——中動態であらわされるそのような出来事からすれば、私も「もの」も、同じ資格であり、どちらも同じように主語になるということであろう。ひとがあえて芸術体験をそのようにあらわすとすれば、芸術は、私が私であること、ものがものであること、世界が世界であることが同時に成立する中動態の出来事を、ひとに体験させる積極的な仕掛けとして、考察することができるのではないだろうか。

註

- 1) Paul Claudel, *L'Oeil Écoute*, Gallimard, 1960, p. 14
- 2) 1883年7月付の手紙。Pascal Bonafoux, *Van Gogh par Vincent*, Denoël, 1986, p. 123
- 3) Maurice Merleau-Ponty, *L'Oeil et l'Esprit*, Gallimard, 1964, p. 30
- 4) ラルース言語学用語辞典 大修館書店 1980, p. 265
- 5) 小学館ロベール仏和大辞典 初版 1988, p. 1605
- 6) Émile Benvenist, «Catégories de pensée et catégories de langue», (*Problèmes de linguistique générale*, Gallimard, 1966 所収)
- 7) Suzanne Kemmer, *The Middle Voice*, John Benjamins Publishing Co., 1993, p. 1-2
- 8) 同上, p. 54, Table 3
- 9) 同上, p. 56, Table 4
- 10) 同上, p. 57, Table 5
- 11) 同上, p. 57, Table 6
- 12) 同上, p. 53
- 13) 同上, p. 131, Table 15
- 14) 同上, p. 133, Table 16
- 15) 同上, p. 135, Table 18
- 16) 同上, p. 143, Table 21および p. 144, Table 22

17) 同上, p.121

18) 同上, p.283

19) バンヴェニストは以下のように能動態しかもたない動詞, 中動態しかもたない動詞を挙げている(原文のまま)。Émile Benvenist, «Actif et moyen dans le verbe» 1950, (*Problèmes de linguistique générale*, Gallimard, 1966所収), p.171-172

I. Sont seulement actif : être (skr. *asti*, gr. ἐστί); aller (skr. *gachati*, gr. βαίνει); vivre (skr. *jīvati*, lat. *vivit*); couler (skr. *sravati*, gr. ῥεῖ); ramper (skr. *sarpati*, gr. ἔρπει); plier (*bhujati*, gr. φεύγει); souffler (en parlant du vent, skr. *vāti*, gr. ἄηό); manger (skr. *atti*, gr. ἔδει); boire (skr. *pibati*, lat. *bibit*); donner (skr. *dadāti*, lat. *dat*).

II. Sont seulement moyens : naître (gr. γίγνομαι, lat. *nascor*); mourir (skr. *mriyate*, *marate*, lat. *morior*); suivre, épouser un mouvement (skr. *sacate*, lat. *sequor*); être maître (av. *xšayete*, gr. κτάομαι; et skr. *patyate*, lat. *potior*); être couché (skr. *śete*, gr. κείμαι); être assis (skr. *āste*, gr. ἵμαι), revenir à un état familier (skr. *nasate*, gr. νέομαι); jouir; avoir profit (skr. *bhunkte*, lat. *fungor*, cf. *fruor*); souffrir, endurer (lat. *patior*, cf. gr. πένομαι); éprouver une agitation mentale (skr. *manyate*, gr. μάλινομαι); prendre des mesures (lat. *medeor*, *meditor*, gr. μήδομαι); parler (*loquor*, *for*, cf. φάτο), etc.

20) 同上, p.172

21) 同上, p.172

22) Roland Barthes, «Écrire, verbe intransif?», 1966, (*Le bruissement de la langue*, Seuil, 1984所収), p.29

23) Jacques Lacan, *Le Séminaire livre III*, Seuil, 1981, p.317

24) 長井真理「分裂病者の自己意識における「分裂病性」」1990 (『内省の構造』岩波書店 1991所収) p.190

25) Descartes, *MEDITATIONES DE PRIMA PHILOSOPHIA*, (*OEUUVRES DE DESCARTES* VII, Vrin, 1996), p.29

26) Jacques Derrida, «La différance» 1968, (*Marges - De la Philosophie*, Minuit, 1972所収), p.9

27) Eugen Fink, «Vergegenwärtigung und Bild» 1930, (*Studien zur Phänomenologie 1930-1939*, Nijhoff, 1966 所収), p.75-76

28) 同上, p.77

(本論文は, 1997年, 第48回美学会全国大会における研究発表を基にしたものである)

The Range of the Middle Voice

Aki MORITA

College of the Arts

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 1998)

In the discourse expressing the artistic experience, we often find in French for example the pronominal verbs, which correspond «the middle voice».

Benvenist pointed out about voice the opposition «active–middle» beside that of «active–passive». He said that the middle verbs indicate a process of which the subject is the seat; the subject is inside the process. The middle voice shows us another relation between the subject and the verb.

In the contemporary thoughts, when the framework of «subject–object» or «active–passive» comes into question, much reference is made to the middle voice. As a category of thought, the middle voice may throw some light on the question of the artistic experience.